



天の川と七夕・星伝説のまち

交野の絵本

監修 財団法人 交野市文化財事業団
編集 交野市星のまち観光協会

発刊のことば

交野は歴史が古く、空や星、七夕にまつわる伝説・お話が多く残っています。

また、平安時代など古い時代から、交野が原や天野川を題材にした和歌・物語もたくさんあります。

交野はまさに宝物でいっぱいです。それらは、遠い日本のおかしの姿をいまにつたえていますので、そこには、日本のこころのふるさと、日本のみなもとがある、ともいえるでしょう。

この本では、交野のそのような宝物のいくつかを、小学四、五年生のみなさん向けに、できるかぎり、わかりやすくまとめてみました。

いままで知らなかったことも、知れば興味がわいて、好きになるものです。この本で、交野のいまとむかしを知って交野に関心をもち、交野を好きになっていただきたいと思います。

しかし、この本は、みなさんに、ただ交野の宝物を知っていただくだけが目的ではありません。

立派な宝物も、蔵にしまっておくだけではカビやサビがつき、くさります。光をあてて風を通し、みがきをかけて残す努力が必要です。この本の編集も、そうした努力のひとつといえます。

みなさんがたも、交野の宝物を、自分の宝物、こころのふるさととしてたいせつにし、さらに次の時代の人たちに、いつそうみがきをかけてつたえていただきたいと思います。

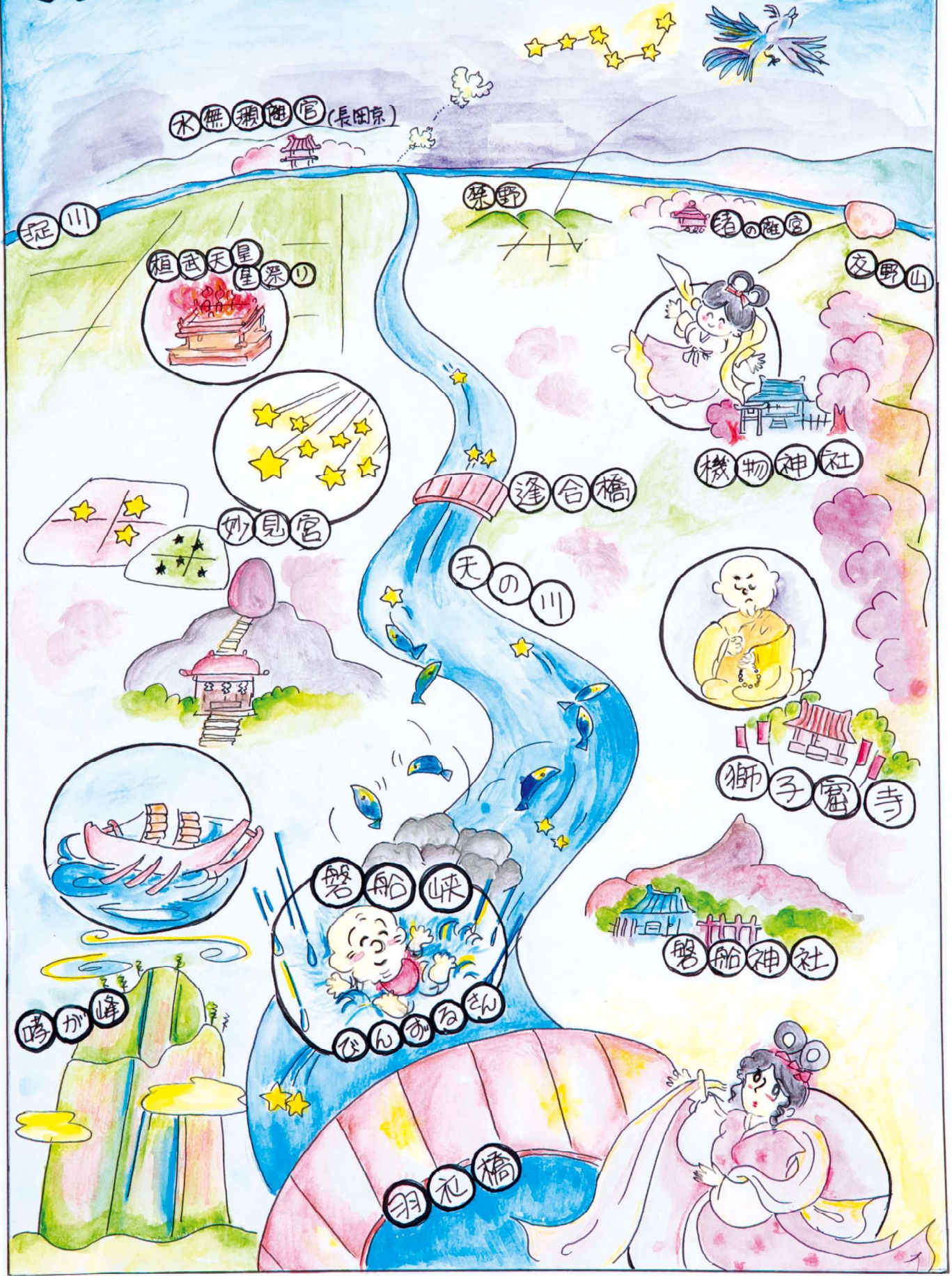
みなさんに、交野をたいせつに思うこころ、ふるさとを愛する気持ちがあれば、宝物は、いつまでも絶えることはありません。

最後に、貴重なご意見をいただいた和久田薫先生、廣岡昌子先生、交野古文化同好会のみなさま、またボランティアで絵画を担当いただいた画家の先生方など、ご協力くださったすべてのみなさま方に心から厚く御礼を申しあげます。

二〇〇七年七月

編集者

天の川と七夕★星伝説マップ★



もくじ

伝説

その一	饒速日命が天からおりてきた………	1
その二	かすみを織る織姫………	3
その三	羽衣を隠された天女………	5
その四	空から北斗星が降った………	7

歴史

その一	磐船神社と饒速日命………	9
その二	機物神社と七夕祭り………	11
その三	星田妙見宮と星降り祭、七夕祭………	13
その四	桓武天皇と星祭り………	15
その五	びんずるさん——私市の雨乞い………	17
その六	交野の母なる川、天野川………	19
その七	天の川七夕まつり………	21

古典文学

その一	枕草子………	六十二段	川は………	23
その二	伊勢物語………	八十二段	………	25
その三	伊勢物語………	八十二段	の和歌	27
その四	伊勢物語………	八十二段	の和歌	28
その五	伊勢物語………	八十二段	の和歌	29
その六	伊勢物語………	八十二段	の和歌	30
その七	天の川を詠んだ和歌………	その一	………	31
その八	天の川を詠んだ和歌………	その二	………	32
その九	交野を詠んだ和歌………	その一	………	33
その十	交野を詠んだ和歌………	その二	………	34

資料と補足編

………	12
-----	----

伝説 その一 (資料と補足編 1頁を見てね)

交野には、日本の国のはじまりのころの神話
がたわわっています。

饒速日命が天からおりてきた

にぎはやひのみこと

むかし、天の神の国に饒速日命にぎはやひのみことという神さま
がおりました。神の国をおさめる天照大神あまてらすおおみかみという
神さまの孫でした。

「そなたが、豊葦原とよあしはらの中津国なかつくに(日本国のいちばん
古いよび方)をおさめるがよい」

ある日饒速日命にぎはやひのみことは、天照大神あまてらすおおみかみからそのよう
なおこトばをうけました。

そうして、王のしるしや大勢のお供おおぜいや船頭せんどうを
もらいました。

そこで饒速日命にぎはやひのみことは、準備がととのうと、天の
磐船いわふねという船で天の港みなとをたちました。

大空を船で飛んでいくと、やがて下に島のつら
なつた国が見えてきました。

「おお、大和やまとの国(日本のよび方)だ」

饒速日命にぎはやひのみことがそういって天から船でおりてきた

ところは、交野たけるの哮みねが峰みねでした。

饒速日命にぎはやひのみことは、そこから峠とをこえて奈良の鳥
見みの白庭山しろにわやまにはいり、むかしからその地方をおさ
めていた長髓彦ながすねひこの妹と結婚し、のちに、やまとで
国をきざきました。

やがて、九州から神武天皇じんむてんのう(初代天皇)が
攻めてくると、天皇に味方みかたしてこれにつかえまし
た。饒速日命にぎはやひのみことの子孫は物部氏もののべしと名のり、交野
や奈良にひろがっていきました。

交野の絵本



絵
桂
聖
子

伝説 その二 (資料と補足編1頁を見てね)

交野には、かわいそうな織姫おりひめのものがたりが
たわっています。

かすみを織る織姫おりひめ

おかし、空の天の川の西に織姫おりひめさまがすんでい
ました。おさないときから、機織はたおりがとてもじょうず
でした。織姫おりひめさまが織おった美しい布は、地上まで
とどいてかすみや雲となり、みわたすかぎり山や
野原をつつむのでした。

織姫おりひめさまが大きくなったので、お父さまの神さ
まが、川の東から、牽牛けんぎゅうというりっぱな若者をお
むこさんにむかえました。

おおよろこびした織姫おりひめさまは、牽牛けんぎゅうに夢中むちゅうにな
り、布を織おらなくなりました。心配したお父
さまが、なんとか注意しましたが、ききめがあり
ません。

「空のようすがおかしいぞ。ちかごろ、かすみや雲
がでないぞ」

とうとう地上のひとびとがさわぎだったので、し
かたなく、お父さまの神さまは、牽牛けんぎゅうを川の東へ
かえしました。そうして、年に一度、七月七日
の夜だけ、ふたりが会うことをおゆるしになりま
した。

いまでも、織姫おりひめさまは、その日をたのしみにまちな
がら、せつせと布を織おっています。

交野の絵本



絵
奥田
達治

伝説 その三 (資料と補足編2頁を見てね)

交野には、天から舞いおりて天の川で水浴びする天女のものがたりがつたわっています。

羽衣を隠された天女

おかし、天の川は白い砂がひろがり、まんなかを青くすんだ水が流れていました。

あるとき、天の川の禁野というところに、天女が舞いおりてきました。

まわりにだれもないので、美しい羽衣を木の枝にかけ、青い水にからだを沈め、水浴びを楽しんでいました。

そのとき、川へ遊びにきた若者が天女を見て

すっかり心をうばわれ、およめさんにほしいと思いい、そっと羽衣を隠しました。

人がいるのに気づいた天女が、水から飛びだし、羽衣を着ようとしたのですが、見つかりません。

天女は泣きだしてしまいました。

「羽衣が見つかるまで、家においで…」

と、若者は、やさしく声をかけて衣を着せてあげ、天女を家につれて帰り、ふたりは結婚しました。

それから三年たったある日、若者が家を留守にしたとき、天女がふと押入れをのぞくと、隠れていた羽衣が見つかりました。

天女は、おおよろこびでそれを着ると、空高く舞いながら、天へ帰っていきました。

交野の絵本



絵
奥田
達治



伝説 その四

(資料と補足編3頁を見てね)

交野には、空から北斗星が降った伝説が伝わっています。

空から北斗星が降った

むかし、獅子窟寺の大きい岩のほら穴で、お坊さんがお経を唱えていました。

そのころ、深い山や大きい岩には神さまの霊が宿ると信じられ、人里はなれた山や大きい岩で修行すると精神の力が高まるとされていたのでした。

このお坊さんは、空海といい、あちらこちらのお寺や山々で修行ののち、大嵐をものともせず

中国にわたり、新しい仏教や学問、土木技術などをおさめた立派なお方でした。

お経を唱えるうち、あたりは暗くなって夜もふけました。空にはお星さまがいっぱい輝いています。

そのとき、稲光のような光の筋が、夜空を走りました。流れ星です。空海が、思わず顔をあげると、七曜星(北斗七星)が、目のまえを長く尾を引きながら、つぎつぎと星田の村の三カ所に降っていくのが見えました。

それらは、妙見山と光林寺、星の森で、それぞれの距離が八丁(約九〇〇メートル)だったところから「八丁三所」と呼び、いまも、そのときの石が大切に祀られています。

交野の絵本



絵
桂
聖
子

歴史 その一 (資料と補足編3頁を見てね)

磐船神社と饒速日命

磐船神社のご神体は、巨大な船のかたちの岩です。この神社から谷ひとつへだてた北の峰に、饒速日命が、天から降りてきたときの天の磐船だといいつたえられています。

ご祭神は、饒速日命で、神武天皇が大和朝廷をたてるときこれを助け、のちに物部の姓をもらい、物部氏を開いたご先祖とされています。

徳川家が大阪城を再建するとき、この巨石を運ぼうとしましたが、割ろうとすると血が出てきたので思いとどまったといいつたえられています。

この神社には、岩窟めぐりがあります。

地下の洞窟へ降りていくと、ごろごろと巨岩がかさなり、まるで魔境へ迷い込んだみたいの不気味です。

いまは改修され、天野川の本流は、神社の裏山をくりぬいたトンネルを流れています。以前は、本流が、この洞窟へ流れ込んでいましたので、大雨がふると、すぐにあたりが洪水のために水浸しとなったのです。

近ごろ、水質がよくなって神社のまえの旧川の天野川には、シジミやカワニナ、タニシなどがたくさんもどってきました。

交野の絵本



絵
杉
浦
つ
か
さ

歴史 その二 (資料と補足編4頁を見てね)

機物神社と七夕祭り

この神社は、たなばた姫を祀っています。

七月七日の七夕祭りには、境内に笹竹をいっぱい立て、願いごとを書いた五色の短冊をつり、にぎわいます。テレビでもおなじみです。

大むかし、人びとは、すぐ東にある交野山の大きな岩をこの神社から拝んだようです。

その後、この地に機織の技術をもった渡来人が大陸から移り住み、祖先の漢人庄員という人を祀って氏神としました。

ところが、平安時代に交野が原に桓武天皇

や貴族が狩りや花見にやってきたあと、この氏神が、たなばた姫にかわりました。

豊臣秀吉が有名な醍醐の花見の日が晴れるように、この神社にお祈りしたといういつたえも残っています。

江戸時代の記録には、毎年七月七日、身を清めた一人の男の子をたてて祭礼をおこなったとあります。

この神社で、現在のやりかたの七夕祭りが行われるようになったのは、昭和五十四年からです。

交野の絵本



絵
杉
浦
つ
か
さ

歴史 その三 (資料と補足編5頁を見てね)

星田妙見宮と星降り祭、七夕祭

星田妙見宮のご神体はふたつの大岩で、妙見石、または織女石とよばれ、影向石つまり神さまや仏さまが姿をかえた石とされます。

弘法大師空海が、私市の獅子窟寺でお経を唱えたら、北斗七星が降ってきて、そのふたつがここに落ちたといいつたえられています。

このように北極星や北斗七星を信仰する考えは、中国からつたわりましたが、北極星は、天皇しかお祀りできなかつたので、庶民は、北斗七星を祀つたのでした。

この神社の名がはじめて本に出てくるのが平安

時代の末で、室町時代にはひとびとの信仰を集め、江戸時代末には多くの信者でにぎわつたという記録があります。

江戸時代のはじめ、磐船街道を旅した貝原益軒が、磐船峡あたりから「この谷の奥に、星の社がある。そこに祀られているのは、牽牛と織女である」と書き残しています。

その時代、星田妙見宮が七夕の神社としてもよく知られていたことがわかります。

この神社では、七夕の日、短冊の願いがかなうようにと護摩の供養や、神楽の奉納がおこなわれています。七月二十三日には、星の降つた日として星降り祭がおこなわれます。

交野の絵本



絵
桂
聖
子

歴史 その四 (資料と補足編5頁を見てね)

桓武天皇と星祭り

奈良の平城京で即位した桓武天皇は、みだれた国のしくみを新しい土地で立てなおそうと考え、都を、奈良から京都の西の長岡京(いまの向日市、長岡京市)へ移すことにしました。天皇は、新しい都の災いをはらい、無事を祈るために、新しい都の真南にお祭りの壇をつくって火をもやし、北極星にお祈りをささげる星祭りをおこなうことにしました。

これは中国の古くからの考えで、北極星が、中心にあつて動かず、まわりの星が動くことから、天を支配するもつとも偉い星と信じて祈ったので

した。

交野が原は、長岡京の真南にあたりますので、お祭りの壇が置かれることになりました。

桓武天皇は、ここで二回、星祭りを行ったほか、たびたび狩りにもやってきました。

それで交野が原は、すっかり有名になり、京都の貴族が別荘をたてたり、狩りや花見、宴会にやってくるようになりました。

そのとき、天野川や交野が原で風流を楽しんだようすが、平安時代、鎌倉時代の和歌や物語、随筆としてたくさん残ることになりました。

交野の絵本



絵
杉
浦
つ
か
さ

歴史 その五

(資料と補足編6頁を見てね)

びんずるさん — 私市の雨乞い —

田んぼに水が必要なとき、日照りが続きますと、むかしは、雨乞いをしました。稲が枯れてお米がとれないと、生活に困りますので、必死で、神さまや仏さまに、雨をふらしてくださいとお祈りしたのです。

私市では、獅子窟寺に祀ってある、いつも赤い顔の賓頭盧尊にお出ましたいただきました。

村人は、賓頭盧尊の首に穴の開いた硬貨をぶらさげ、行列をつくって私市の蓮華寺へお迎えし、二十一日間、交代でお祈りをささげました。

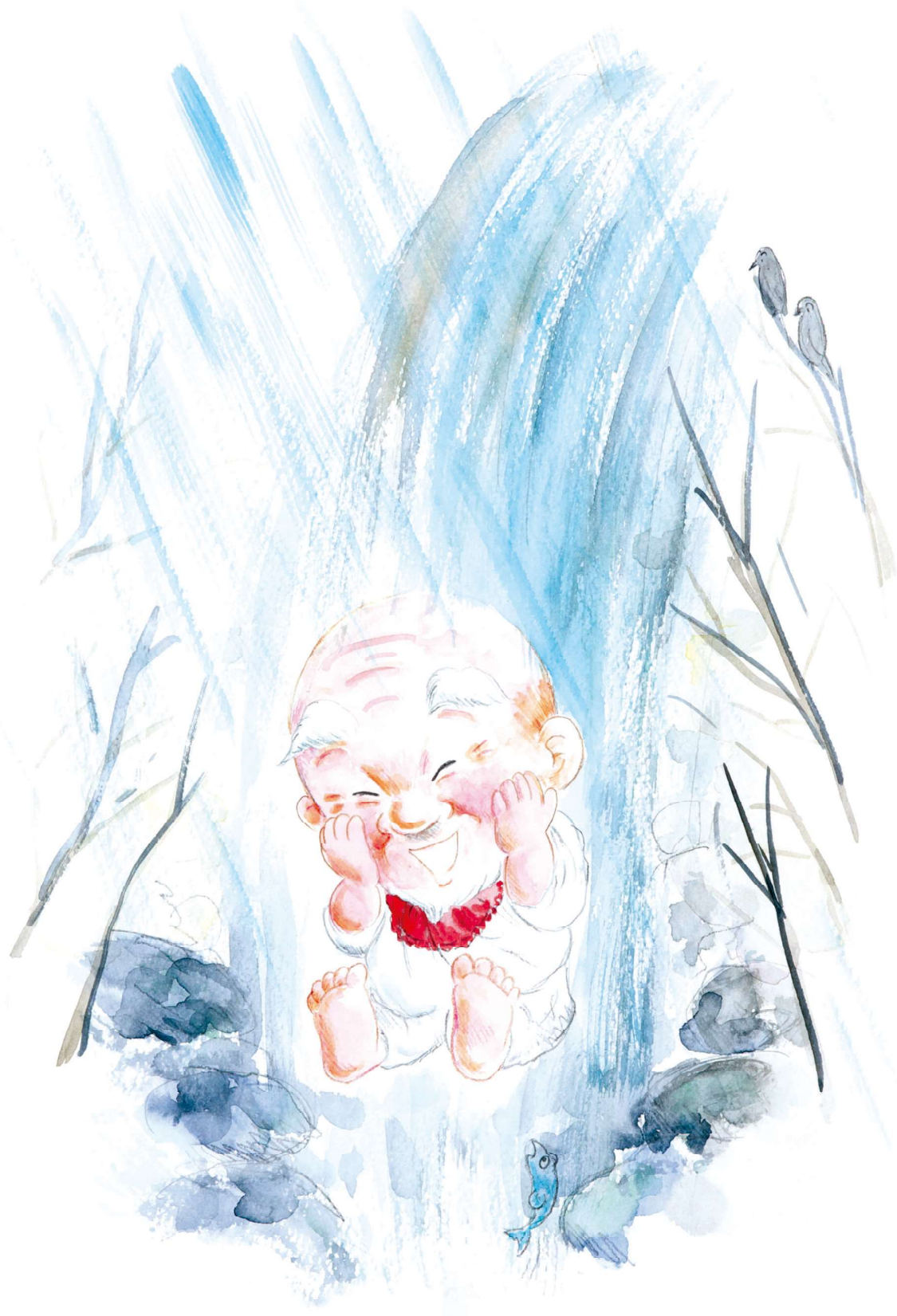
それでも雨がふらないと、つぎは、賓頭盧尊の

顔に白粉をぬって鮎返しあゆがえの滝の水の無い滝つぼに吊りさげました。

賓頭盧尊は、お釈迦さまのお弟子で、願いをかなえる力、つまり神通力の優れた方といわれます。いつも赤い顔の、その賓頭盧尊が白粉をぬられると、あまりにはずかしいので、「よし。わしの神通力で、ここはひとつ雨をふらせ、この滝の水で、顔の白粉を洗うとしよう」と思うにちがいないと、むかしの人は考えたのかもしれない。

むかしの村人の、お米づくりにかける必死な思いが伝わってきます。

交野の絵本



絵
杉
浦
つ
か
さ

交野の母なる川、天野川

肩野物部氏一族が、天野川流域で米をつくりはじめ、やがてこの地一帯を「おいしい米のとれる野」甘野、その川を甘野川と呼び、それが後に「天野川」となったと、交野市史(交野町略史復刻編)に伝えられています。

桓武天皇が、交野が原で星祭りをおこなってからは、京都の貴族がたびたびこの地を訪れ、天野川が脚光をあびます。

銀河の名を借り、天野川を「天の川」とあらわし、中国から伝わった七夕伝説をあてはめて和歌をつくるなど、風流を楽しみました。

江戸時代、この地を訪れた貝原益軒は、獅子窟寺からこの川を眺め、「こんなに白砂が延々とつづく美しい川は見たことがない。星をちりばめた銀河そっくりで、まさに天の川という名がぴったりだ」と書き残しています。



交野の絵本

この川の美しさを見た感動が、七夕伝説や羽衣伝説となり、いまにつたわるのかもしれない。

しかし、雨のときは大変でした。現在の逢合橋は長さ三五メートルです。江戸時代、ここは一ニ六メートルあったといわれます。兩岸に堤防はなく、大雨がふると、川幅が一挙にひろがりました。橋はなく、渡し舟が通っていました。大雨のとき、人びとは、どうしたのでしょうか。



絵
桂
聖子

歴史 その七

(資料と補足編7頁を見てね)

じめられました。

天の川七夕まつり

参加する地域は十あまり、藪^{やぶ}へ入って竹の伐採から竹灯籠づくり、飾りつけ、点灯から後始末まですべてボランティアで行います。

七月七日、川面に夕風があたりはじめるころ、天野川堤^{つづみ}の約一・五キロに並べられた竹灯籠千基に、いっせいに火がともされます。

企画、運営、警備なども約七十名の観光ボランティアが担います。三十近い飲食や金魚、ヨーヨーなどのお店がですが、一部は地域の

すっかり日が暮れると、天野川の岸辺の黒々とした木々を背景に、灯火^{ともしび}が点々と浮かび、幻想的な雰囲気包まれます。

ポランティア、あとは、交野で商売されている市民の皆さんがんばります。

これは、天の川七夕まつりの一シーンで、七夕姫^{まつ}を祀^{はた}る機物^{もの}神社^{じんじや}、織女^{おりひめ}石^{いし}がご神体の妙見宮とともに、交野の七夕まつりを盛りあげようと、二〇〇五年に市民手づくりのまつりとして

これは、市民のまつりであると同時に、里山にはびこる竹を伐採するという意味で、環境にやさしいまつりでもあるのです。

交野の絵本



絵
杉
浦
つ
か
さ

古典文学 その一（資料と補足編8頁を見てね）

枕草子 六十二段

川は

川は、飛鳥川。淵瀬も定めなく、いかならんとあはれなり。大堰川。音無川。七瀬川。

耳敏川、またもなにごとをさくじり聞きけむとをかし。玉星川。細谷川。

いつぬき川、澤田川などは、催馬楽などの思はするなるべし。名取川、いかなる名をとりたるならむと聞かまほし。吉野川。

天の川原、「たなばたつめに宿借らむ」と業平がよみたるもをかし。

現代語訳

川は

川は飛鳥川。深みも浅瀬も定めなく変わるというのが、どんな感じなのだろうとおもしろい。

大堰川。音無川。七瀬川。
耳敏川は、またもなにごとをこざかしく聞いたの

かしらと興味ぶかい。玉星川。細谷川。
いつぬき川。澤田川などは、古い馬子歌などを思いださせる。名取川、どんな名を取ったのか聞いてみたい。吉野川。

天の川原は、「七夕姫に宿を借りましょう」と業平が詠んだのがすてき。

交野の絵本



絵
奥
田
達
治



古典文学 その二（資料と補足編8頁を見てね）
伊勢物語 八十二段 現代語抄訳

むかし惟喬親王は、桜のころ水無瀬の離宮へよく出かけられました。いつも右馬頭という馬屋の長官（在原業平）がお近くに仕えていました。

あるとき、交野の渚の離宮でのこと、桜が見事だったので一行は、皆、馬から下りて和歌を詠みました。右馬頭（在原業平）も詠みました。

世の中にたえて桜のなかりせば

春の心はのどけからまし

すると、別のひとが、それに返しました。

散ればこそいとど桜はめでたけれ

浮き世に何か久しかるべき

夕方になると、供の人が酒を持ってきたので、酒を飲むよところはなにかと、探すうち、天の川というところに着きました。

親王が「交野で狩りをするうち天の川について」と題して和歌を詠もうとおっしゃったので、右馬頭（在原業平）が詠んでさしあげました。

狩り暮らし棚機つめに宿からむ

天の川原にわれは来にけり

すると、お供のひとり紀の有常が、それに返しました。

ひととせにひとたび来ます君まてば

宿かす人もあらじとぞ思ふ

交野の絵本



絵
奥
田
達
治



古典文学 その三（資料と補足編9頁を見てね）
伊勢物語 八十二段の和歌 その一

世の中にたえて桜のなかりせば

春の心はのどけからまし

在原業平



和歌の意味

この世に桜さえなかつたら、春のころの心は、気をもむこともなくのどかでしょうね。

絵 奥田 達治

交野の絵本

古典文学 いせものがたり その四（資料と補足編9頁を見てね）
伊勢物語 八十二段の和歌 その二

散ればこそいとど桜はめでたけれ

浮世に何か久しかるべき

伊勢物語 八十二段

和歌の意味

散るからこそ桜はいつそうめでられるのです。
この浮世に何か久しく姿のかわらないものがあるでしょうか。

絵 津村 喜美子

古典文学 その五（資料と補足編9頁を見てね）
伊勢物語 八十二段の和歌 その三

狩り暮らし 棚機つめに宿からむ

天の川原にわれは来にけり

在原業平

繪正

和歌の意味

狩りをして一日も暮れたので七夕姫に宿を借りましょう。
七夕で有名な天の川原に来たのですから。

絵 猪倉 稔正

交野の絵本

古典文学 いせものがたり その六（資料と補足編9頁を見てね）
伊勢物語 八十二段の和歌 その四

ひととせにひとたび来よ寸君まてば

宿かす人もあらじとぞ思ふ

紀有常

前



和歌の意味

その人は、一年に一度いらつしやるお方をお待ちですから、宿を貸されることもあるまいと思えますよ。

絵 前原 敏子

古典文学 その七（資料と補足編10頁を見てね）
天の川を詠んだ和歌 その一

天の川遠き渡りたなうにけり

交野の御野の五月雨の頃

続後撰和歌集 藤原為家



和歌の意味

天の川は水かさがまして渡し場が遠くなりました。いま、交野が原は五月雨のころです。

絵 奥田 達治

交野の絵本

古典文学 その八（資料と補足編10頁を見てね）
天の川を詠んだ和歌 その二

七夕は思い知らずん天の川

急ぐ渡しに船を貸しつる

新後拾遺和歌集 津守国助



和歌の意味

織姫と牽牛に天の川のようにすを知らせましよう。急いで渡るなら船を貸していますよと。



絵 奥田 達治

古典文学 その九（資料と補足編11頁を見てね）
交野が原を詠んだ和歌 その一

よきたや見ん交野れみ野の桜がり

花の雪散る春のあけぼの

新古今和歌集 藤原俊成



和歌の意味

またもやめぐりあえるでしよか交野の野辺のこのような観桜に。いま、花が雪となって舞う春陽ほのかな早朝です。

絵 奥田 達治

交野の絵本

古典文学 その十（資料と補足編12頁を見てね）
交野が原を詠んだ和歌 その二

やかたとの鷹手にすえて朝立てば

交野の原にきぐす鳴くなり

堀河院御時百首和歌 藤原基俊



和歌の意味

尾の立った鷹を手に止まらせて、朝、交野が原の露を踏むと雉が鳴いていますぞ。

絵 奥田 達治

資料と補足編

ここには、本文の出典やそこに書ききれなかった内容を補足として収めています。お子さまが本文を読まれたあと、または、お子さまに本文を読み聞かせながら、本文のイメージをふくらませるため、ご家族の方などが、この内容を語ってあげていただきたいと願い、編纂しました。

写真は、京阪交野市駅まえ噴水場のレリーフです。右は織姫、左は牽牛です。鳥は、かささぎという名で、伝説では、この鳥がかけた橋を渡って二人は、七月七日、年に一度あいます。



もくじ

伝説	その一	饒速日命 <small>にぎはやひのみこと</small> が天からおりてきた	1
伝説	その二	かすみを織る織姫 <small>おりのひめ</small>	1
伝説	その三	羽衣を隠された天女 <small>はごろもかくてんによ</small>	2
伝説	その四	空から北斗星が降った <small>ほくとせいふ</small>	3
歴史	その一	磐船神社と饒速日命 <small>いわふねじんじやにぎはやひのみこと</small>	3
歴史	その二	機物神社と七夕祭り <small>はたものじんじやたなはたまつ</small>	4
歴史	その三	星田妙見宮と星降り祭、七夕祭 <small>ほしだみょうけんぐうほしくださいたなはたまつ</small>	5
歴史	その四	桓武天皇と星祭り <small>かんむてんのうほしまつ</small>	5
歴史	その五	びんずるさん——私市の雨乞い <small>きさいちあまこ</small>	6
歴史	その六	交野の母なる川、天野川	6
歴史	その七	天の川七夕まつり	7
古典文学その一		枕草子	8
古典文学その二		伊勢物語	8
古典文学その三		世の中にたえて桜の	9
古典文学その四		散ればこそいとど桜は	9
古典文学その五		狩り暮らし棚機つめに	9
古典文学その六		ひととせにひとたび来ます	9
古典文学その七		天の川遠き渡りに	10
古典文学その八		七夕は思いしらなん	10
古典文学その九		またや見ん交野のみ野の	11
古典文学その十		やかた尾の鷹手にすえて	12

○ 参考文献

交野市史 交野町史復刻編 (昭和五十六年 交野市)
 交野市史 民俗編 (昭和五十六年 交野市)
 星田歴史風土記 (平成七年 和久田薫 札塾耕三著)
 先代舊事本紀 (二〇〇一年 批評社)
 伝説の河内 (昭和五十三年 松本壮吉著 歴史図書社)
 河内名所図会 (平成二年 秋里籬嶋編 柳原書店)
 己巳紀行(新日本古典文学体系) (一九九一年 岩波書店)
 交野ヶ原と七夕伝説 (平成十六年 天の川七夕星まつりの会)
 北河内の歴史 (一九九六年 郷土出版社)
 日本史辞典 (一九九六年 角川書店)
 解通 名歌辞典 (一九九〇年 創拓社)
 枕冊子 (昭和二十九年 田中重太郎 旺文社)

○ インターネット文献

伊勢物語 <http://www.isemonogatari.com/>
 現代語訳 先代旧事本紀 <http://www.h4.dion.ne.jp/~munyu/kujihonki/>
 南遊紀行 <http://www.2s.biglobe.ne.jp/~jyohou/nanyuukkou1.htm>
 歴史入門サイト 歴史の扉 <http://www.2.odn.ne.jp/reksinotobira/index.html>
 古今和歌集の部屋 <http://www.milord-club.com/index.htm>
 新古今和歌集の部屋 <http://home.clas.net/~jikan314/>
 河川に関する文化財リスト (国土交通省河川局ホームページ) <http://www.mlit.go.jp/river/rekishibunka/kouzoubutsu04.html>

伝説 その一 (本文1頁を見てね)

饑速日命が天からおりてきた

この物語は先代旧事本紀という古代の歴史書に載っています。作者不詳ですが、古代の伝承や古事記、日本書紀をもとに、平安初期に編纂されました。物部氏の記述が多いことから、物部氏との関連が注目されています。

「哮が峰」(原文では、「哮 峯」または「哮 峯」)は星のブランコの入口、ピトンの小屋の北側の崖の頂上にあります。このときの天の磐船は、磐船神社のご神体の船形巨岩とされています。

この物語は、大むかし、渡来人が、海を船で渡って淀川から天野川をのぼり、交野が原に定住するようになったようすを連想させてくれます。

写真1でわかるように、神秘的な伝説の場所とされる哮が峰のすぐそばに、いまは、ロッククライミングの壁がつくられています。



写真1. 哮が峰(中央)とロッククライミングウォール(左)

一九九七年、大阪国体でロッククライミングの競技場となりました。この壁の山頂には、奇岩群の岩内道があり、ひとが這って通れましたが、昭和初期、石屋がこれを買って爆破して石垣用にきりとり、持ち去りました。天の磐船が空から降りてきたとされる伝説の場所だけに、このあたりが自然の姿とどめないのは残念なことです。

哮が峰の絶壁では、毎年春、鷹が巣をつくるようですが下から見られます。

伝説 その二 (本文3頁を見てね)

かすみを織る織姫

この物語は、『伝説の河内』という本に「倉治機物神社の話」という題で載っています。

「七夕伝説」は、中国につたわる「天帝の娘、織女星と牽牛星」の物語で、古くから織物をつかさどる織女星と農耕をつかさどる牽牛星を祀り、機織の上達や豊作を祈る乞功奠という風習がありました。

これが日本に伝わり大和朝廷でも、技芸の上達を祈り乞功奠を行いました。しかし、この伝説が伝わるまえ、日本には「棚機女」という巫女が、水辺で神の降臨を待つという農村の禊の行事があったといわれます。それと中国の伝説が合体したのが、日本の七夕伝説で、タナバタという読みは、「棚機女」からきたといわれます。

一説に、農村の七夕祭りは、すぐあとの盂蘭盆(お盆)の行事の準備祭の色合いが強く、そ

のために襖みぎきをするのだともいわれます。

さらに、五節句と呼ばれ、中国の暦と日本の農耕風習が合わさり、季節の節目に宮中で邪気を祓う儀式が奈良時代から行なわれてきました。七夕祭りは、七夕の節句（七月七日）に相当し、七草の節句（一月七日）、桃の節句（三月三日）、端午の節句（五月五日）、菊の節句（九月九日）など五節句のひとつで、次第に庶民のまつりとして親しまれるようになります。

なお、笹に短冊などをつるすいまの七夕祭りは、江戸時代から始まったといわれます。

七月七日、日本の夜空には、伝説の織女星（こと座の一等星ベガ）と牽牛星（わし座の一等星アルタイル）は、天の川をはさんで西と東に位置して午後九時ごろ東の空にのぼり、午前零時ごろ、天頂にさしかかります。ふたつの星の距離は、十四・八光年あり、天の川によって隔てられたままで、この夜、伝説のように近づいたりするわけではありません。

伝説 その三

（本文5頁を見てね）

羽衣を隠された天女

この物語は、『伝説の河内』という本に「羽衣を隠さる：禁野天の川の伝説：」という題で載っています。

羽衣伝説は、日本の各地に残り、静岡の三保の松原、滋賀県余呉湖が有名です。羽衣伝説は、景勝の地に多く、天女は、白鳥を擬人化したものといわれますが、あなたはどう思われますか…。

ちなみに、交野には羽衣橋という名の橋が、天野川の最上流磐船神社の少し上流にあります。この物語の「禁野」は、天野川の最下流、淀川に近いところにあります。

どちらにしても、天野川流域が、むかし、景勝の地であった証拠として羽衣伝説が残ったといえましょう。

この物語は、今風にいえば、人間（若者）に自然（天）へ戻る手段（羽衣）を奪われた

地球（天女）を意味しているといえるかもしれません。

むかし、天の川は何度も氾濫したと記録にあります。明治以降、山の植林や堰堤、護岸工事などにより、治水はよくなりました。そのかわり、写真2の羽衣橋のようすでもわかるように、岸は護岸壁でおおわれ、天女が舞い降りたくなるような白砂の美しい川の景色は失われました。



写真2. 羽衣橋 両岸が護岸壁で固められています

伝説 その四

(本文7頁を見てね)

空から北斗星が降った

この物語は、「妙見山影向石縁起」、江戸時代の名所案内「河内名所図会」などに載っています。

このとき降った石は八個で、妙見山に二個、光林寺に一個、星の森に五個とされ、星の森では四個が石組みのなかにうめられ、現在は、一個だけ祀られています。

交野には、磐船神社や交野山などに巨石が多く、巨石信仰の対象となっています。この物語もそのひとつで、交野の山に見られる山岳信仰（獅子窟寺や交野山一帯は修験者の霊場だった）とともにアニミズム（自然崇拜）のひとつとすることができます。

巨石や深山に神の霊が宿るという考えは、単なる迷信と片づけてはならないと思われまます。自然破壊が進む今日、この考えは、自然と共生する大切な視点として新しい意味

を持ちはじめたのではないのでしょうか。

「巨木は神の霊が宿るので切れば祟りがある」と、いまでも一部のひとびとには信じられています。巨石の信仰も巨木の信仰も大切に受け継ぎたい自然と共生する心といえます。

もし、山に神の霊が宿るといふ山岳信仰がいまも生きていたら、写真3のように、山に不法投棄をするような、「神罰」の当たることはだれもしないのではないのでしょうか。



写真3. 交野市の山には、不法投棄がたえません
毎年、市の職員の方々が回収されています

歴史 その一

(本文9頁を見てね)

磐船神社と饒速日命

ご神体の船形巨岩には「加藤肥後守」と刻まれています。加藤清正が「肥後守」に任じられたのは一六〇三年のことで、関ヶ原の戦（一六〇〇年）のあとの徳川時代です。それまでは「主計頭」の役にありました。築城、治水、干拓の名手でもありました。

この神社の少し下流に、大阪府指定の史跡磐船峡があります。このあたりは、深い峡谷が刻まれ、水勢にえぐられた岩間を縫うように川が流れ、自然美あふれる景勝の地で、巨岩をご神体とする磐船神社とともに名勝として親しまれてきました。

むかしから峡谷の右岸の絶壁の上を磐船の古道が通っていました。江戸時代、この地を訪れた貝原益軒もここを通りました。

しかし、今は道が崩れて通行止めとなっています。早く復旧させ、名勝磐船峡を通して、

磐船神社まで行けるようにしたいものです。

明治時代、このあたりで追いはぎがよくでたそうです。ある日、ひとのすんでいないはずの磐船峡からネギが流れてきて足が付き、御用となったのだそうです。

昭和に入ると道が広げられて小さな車が通れるようになり、周囲が松茸山だったので、秋の行楽シーズンには、車が運転を誤ってよく落ちたそうです。

昭和二十九年、磐船峡を東へ迂回する新しい道がつけられてトンネルが掘られ、さらに昭和六十三年、拡張改良されて車の往来が楽になりました。

平成十三年、磐船神社の前にあった天野川と磐船街道を神社の裏山に新しく二つのトンネルを掘って通す工事が完成し、治水と交通の両面で大きく改善されました。なお、新しいトンネル放水路は出口が滝となっていますので、旧川に一定の水を流して魚道とし、水生生物の往来に配慮がなされています。

天野川の水質をよくするには、もっとも上

流のこのあたりの水の浄化などが大切です。

その試みが、磐船神社前の旧川上流でおこなわれて貝類がたくさんもどり、とくにカワニナは蛍の幼虫のエサになるので、つぎは蛍をとばそうという話もちあがっています。

歴史 その二 (本文11頁を見てね)

機物神社と七夕祭り

交野が原を訪れた平安貴族は、天野川を空の銀河に見立て、中国から伝わった七夕伝説にちなんだ和歌を詠み、風流を楽しみました。そのような風潮のなかで、この神社の祭

神も、平安時代以降、たなばた姫といわれるようになったとされます。

この神社には「霞を織る織姫」の伝説が伝わっています。

むかし、農村では、七月七日は、盂蘭盆(お盆)の前祭で、襖の意味合いが強かったとい

われます。本文の「毎年七月七日、身を清めた一人の男の子をたてて祭祀をおこなった」という記録は、この神社でもそのような襖がおこなわれた証拠かもしれません。

逢合橋が、天野川の私部地区にかかっています。七夕伝説にちなみ、機物神社の七夕祭りでは、七月七日の夜、ここから短冊を天野川に流します。ただ、伝説では、織姫と牽牛が逢うのは「かささぎ」という名の鳥が翼を広げてつくる橋とされます。

小倉百人首にも撰ばれている大伴家持(奈良時代の歌人)の和歌、新古今和歌集、冬に、次の一首があります。

かささぎの渡せる橋に置く霜の白きを見れば夜ぞ更けにける

この和歌で、作者は、宮中での宿直の折、御所の橋に置いた霜を見て冬の夜更けを実感するのですが、その橋を、織姫と牽牛が通うため、夏の夜空の銀河にかけられた「かささぎの橋」に見立てています。



写真4. 逢合橋 もともとの橋の南北に色の異なる歩道橋が追加工事されました

あいあいばし
逢合橋といえは、そんな「かささぎの橋」とイメージの重なる橋ですが、写真4でもわかるように、伝説にふさわしい姿をしているとはいえませんが、いつか、市民の手で夢のある橋に架けかえたいものです。

歴史 その三

(本文13頁を見てね)

星田妙見宮と星降り祭、七夕祭

早朝、神社の森に足を踏み入れると、頭から野鳥の声がいっぱい降り注ぎます。

以前、裏山は、天野川溪谷まで深い山で続いていましたが、いまは住宅地が開け、この森だけが残されました。そのとき、古墳時代の妙見山古墳が発見されましたが、宅地化とともに失われました。この自然のままの森をいつまでも大切にしたいものです。

神社への参道の妙見川原は、桜で有名です。

むかしの名所案内の絵に「この桜が出てくるのは、江戸時代末期です。明治時代の末、大々的に四百本の桜が植えられて有名になり、臨時列車が出たほどだったといっています。

終戦のとき、占領軍の兵士が来て乱暴しては困ると、その桜はすべて伐採されましたが、まもなく植えなおされ、こんにち、その桜が見事な花を咲かせています。

いまも、町のひとびとによって、枯れた桜

は植えかえられ、土手の雪柳やれんぎょうが手入れされ、星田の青い山並みに映えます。

ところで、桜を詠った有名な藤原俊成の和歌、「またや見ん 交野のみ野の桜がり 花の雪降る 春のあけぼの」は、時代から見て、この地の桜ではなさそうです。あなたは、どのあたりの桜だと思いますか…。

歴史 その四

(本文15頁を見てね)

桓武天皇と星祭り

桓武天皇は、母(高野新笠)が渡来系出身だったこともあり、百済王の本拠地だった交野が原に足しげく通い、手厚く扱ったといわれます。

星祭りの壇を築いたのが交野が原だったのは、意図をもってのことかもしれません。

桓武天皇の時代、最澄、空海が唐から新しい仏教をもちかえり、最澄が比叡山に

延暦寺、空海が高野山に金剛峯寺を建てました。

ともに深山に寺院を建てたので、日本古来の山や巨石を信じる山岳信仰と仏教（とくに密教）が結びつき、修験道がうまれます。

その影響は交野の山々に色濃く残っています。桓武天皇は、長岡京に遷都して十年も経たずに、今度は、平安京に都を移します。

長岡京に移った直後、遷都責任者藤原種継が暗殺され、犯行の関係者に桓武天皇の実弟、早良親王が含まれていました。親王は、配流中、食を絶って無罪を叫びながら亡くなりました。以後、天皇の身近で不幸が相次ぎます。早良親王の怨念だと噂されます。当時、怨念は、どこからともなく忍びよって、人を殺すと信じられていました。

一説では、その怨念から逃れることも、平安京遷都の目的のひとつだったといわれます。

歴史 その五 (本文17頁を見てね)

びんずるさん ―私市の雨乞い―

交野各地の雨乞いのようすは、交野市史・民俗編(131、305頁)にくわしく載っています。

賓頭盧尊ですが、優れた神通力を使いすぎてお釈迦さまに叱られ、極楽に入ることを許されませんでした。ですから、どのお寺でも、いまも、お堂の外に座っています。

お釈迦さまが亡くなったあとでも、人びとを救い続けると信じられ、像に触れると病気がなおるといので、「なで仏」とも呼ばれます。

雨乞いといいますが、水稲には、いつも水が必要なだけでなく、株わかれがすむころには、土用干しといって田植えのときからはっていた水を落とし、土面に亀裂が入るまで乾かします。開花期には再び水をはり、穂がでそろうと水を引くなど、細かい水の管理が必要

要になります。

鮎返しの滝は、磐船峽にあります。ここに通じる道が、いま不通になっていることは、「磐船神社と饒速日命」(資料と補足編3頁)でふれました。

鮎返しの滝の上には、ペットボトルのゴミが山のように積もっています。道が開通したら、いちばんにこれを掃除せねばなりません。ちなみに磐船神社では、毎夏、岩窟の掃除をしますが、カップラーメン容器などのゴミが二トントラック十台分もでると悲鳴をあげています。大雨のとき、支流となった旧川でも、そんなにゴミが運ばれてきて岩窟にたまります。

歴史 その六 (本文19頁を見てね)

交野の母なる川、天野川

この地一帯を「おいしい米のとれる野」甘野、その川を甘野川と呼び、それが後に「天

野川」となったという記事は、交野市史・交野町略史復刻編 100 頁にくわしく載っています。今日でも、交野のお米はおいしいといわれます。

しかし、最近、「甘野川」という記述は、過去の書物や地名辞典のどこにも掲載がないという意見が出されています。また、「古文書によると、星田地区は荒地が多く、『租』(田地に課された税)を減免するという田があり、交野は、むかし、かならずしも米作の豊かな土地だったとはいえないのではないか」という見解も出されています。

桓武天皇の星祭りについては、歴史四(本文15頁)、天の川に関する和歌については、古典文学その七、八(本文31、32頁)をご参照ください。

貝原益軒が天野川を見て「なるほどその名の通りだ」と書き残した紀行文は「南遊紀行」(一七一三年刊行)にあります。

天野川と尺治川の合流点とその少し上流

に、国指定の登録有形文化財、尺治川砂防堰堤しゃじがわさぼうえんていと天野川砂防堰堤があります。切石をていねいに敷きつめて堰堤や護岸、河床としたもので、

いずれも明治後期、とくに後者は、明治三十二年(一八九九年)に築造されて今も活躍中の大阪府最大の砂防施設です。日本の砂防事業を体系づけたといわれるオランダの技師デ・レーケの指導によるという伝承がありますが、確かなことはわかりません。

天野川は、ちかごろ、水質もよくなってきたさんの生物がすむようになりました。

昆虫類では、ヘビトンボ、ガガンボ、カゲロウ、トビケラ、オニヤンマなど、魚類ではオイカワ、ヨシノボリ、ドンコ、ナマズ、コイ、フナ、ザリガニ、エビ、カワニナ、鳥類では、コサギ、ゴイサギ、カルガモ、カワセミなどがみられます。

天野川では、川を美しく保つため、ボランティアのひとたちが、川の中のゴミを掃除したり、堤防の草を刈ったりする活動をつづけています。

歴史 その七

(本文21頁を見てね)

天の川七夕まつり

第一、二回天の川七夕まつりの概要

一、実施 七月七日 午後七時

二、オーブンセレモニー・点火セレモニー

①吹奏楽演奏 関西創価学園吹奏楽部
②挨拶 榎 主催者、市長、区長代表

③点火セレモニー(子供が点火ランナー)
・古代式火熾ひおこして熾おこした火で点火
・点火ファンファーレ

三、竹灯籠などの設置

①竹灯籠の道 約一キロに星形を切り抜いた竹灯籠など約千基を並べる 十余地区が参加

②二大竹灯籠ミニメント(織姫と彦星をイメージ)

・二〇〇六年は、七月八日付の毎日新聞朝刊の一面に写真掲載

③私市橋下と尺治川両岸に紙灯籠を

並べた(約一〇〇個、約二五〇個)

四、笹飾りをまつり会場に飾りつけ

・十余地区、および小学校・幼稚園

十校が、自治会館、京阪電車の交野

区域の駅に飾ってのちに立てかけた。

五、テント村計二六店出店(第一回は約半分)

・私市橋、日の出橋、水辺プラザ、私市

駅前の四ブロックにテント村設営

・ほとんど売り切れた。

六、祭りの警備、運営は三支所に分け、支所

ごとに正副の責任者を置いた。

七、来場者数

第一回 七、五〇〇名

第二回 一一、〇〇〇名

交野市では、この「天の川七夕まつり」だ

けでなく、どの寺社も、またどの寺社のどの行事もすべて、檀家や氏子という市民の協力によって支えられています。地域文化を支える心を大切に保ちたいものです。

古典文学その一 (本文23頁を見てね)

枕草子

平安中期の随筆。清少納言著。著者が、

一条天皇中宮定子ていしに仕えていたころの回想、

自然観、人生観、行事、事件などが感性豊かに

繊細に、随想風につづられる。『源氏物語』

とならぶ平安時代女流文学の代表作。

川は

清少納言は、宮中に仕えていましたが、

当時、宮中では、交野の天の川といえ七

伝説で有名だったこと、業平が「棚機つめに

宿からむ」と詠った和歌も、よく知られてい

たことがうかがえます。

交野が原の記述「野は」

枕草子には、交野を記述したものに、もう

一編、「野は」(十六段)があります。

野は、嵯峨野いなみのさらなり。印南野。交野。駒

野。飛火野。しめし野。春日野。そうけ野こ

そすずろにをかしけれ。などてさつけけむ。

宮城野。粟津野。小野。紫野。

古典文学その二 (本文25頁を見てね)

伊勢物語

平安初期の歌物語。作者・成立年不詳。和

歌を主体とした一二〇余の短編からなり、在

原業平と目される人物の一代記風に構成され、

恋愛物語が多く収められています。

書名は、主人公が、伊勢神宮の巫女と契り

を結んだ物語がおさめられていることに由来

するとされますが、多くの異論もとなえられ

ています。

「源氏物語」などとともに後世の文学に大

きな影響を与えました。

古典文学その三 (本文27頁を見てね)

世の中にたえて桜の

ありわらのなりひら

在原業平は、いまから約千百年まえ、平

安期の歌人。六歌仙の一人。文徳天皇(在位

八五〇―八五八)の皇子惟喬親王これたかしんのうと親しかつ

たが、皇子が第一皇子でありながら皇太子とされなかったため、業平も不遇でした。

奔放多感な性格で、情熱的な歌風で知られています。

この和歌は、文徳天皇の離宮、渚なぎさの院いん(現在の京阪電車御殿山駅近く)へ惟喬親王と狩りに出かけたときに詠んだものです。

古典文学 その四 (本文28頁を見てね)

散ればこそいとど桜は

不遇のため、狩りや酒宴、歌合せのほか楽

しみのなかった惟喬親王に、業平はお仕えしていたのですが、突然、思いもかけず親王

が出家します。伊勢物語八十三段では、雪の中、老人となった業平が、比叡山の麓まで出家した親王を訪ねる場面がでてきます。

この和歌は、親王のそうした境涯を暗示しているのでしょうか。

約千百年まえ、業平の活躍した平安時代、交野が原を流れる天野川に、中国伝来の七夕伝説をあてはめて風流を楽しんでいたことがうかがえます。

古典文学 その五 (本文29頁を見てね)

狩り暮らし棚機つめに

「棚機たなばたつめ」は、日本古来の伝説上の女性で、村の災厄を祓うため、神が着る衣を川岸で織って降臨を待ち、一夜妻となる巫女のこ

ととされます。これが、中国伝来の七夕伝説の「織女星」と習合したといわれます。

(資料と補足編1頁、「伝説 その二かすみを織る織姫」の項参照)

この和歌は、「伊勢物語」の題名の由来とされる行状と照らし合わせますと、いかにも業平らしい情熱的な内容といえそうです。

二〇〇七年六月、私市植物園前の私市水辺プラザオープンと同時に、この和歌をしるした歌碑が建てられました。歌碑の前の「私市かささぎ橋」をはさみ、七夕伝説を模し、「そとおり姫」と「明星」という桜も植えられました。

古典文学 その六 (本文30頁を見てね)

ひととせにひとたび来ます

伊勢物語のこのくだりを読みますと、平安貴族の遊びのようすがうかがえます。

まず、京の都から水無瀬の離宮(現在の大阪府島本町)へ行って観桜の宴を開きます。

そこから、おそらく船に乗って淀川対岸の樟葉くずはか渚なぎさあたりに渡り、交野が原の渚の院で再び桜を愛でます。さらにまた、足を延ば

して天野川の川原で酒宴を催しています。

一日の行程でないにしても、平安貴族の精力的な遊びぶりに感心させられます。

なお、業平の約五十年後に生まれた紀貫之は「土佐日記」で装い新たな「山崎の大橋」をみて、土佐の国司の任期満了で久しぶりに帰京した実感にひたりますが、その橋は、水無瀬の離宮の北方、大山崎町（京都府）から八幡市（京都府）あたりへ通じていたと思われまます。今日、橋は架かっていません。

また、この和歌の作者紀有常は、業平とは十歳年長の歌人で、業平の正妻（紀有常女）の父であり、業平と親交が深かった人です。

古典文学 その七（本文31頁を見てね）

天の川遠き渡りに

為家は、いまから約七五十年まえ、鎌倉期の歌人ですが、その頃、天の川は堤も橋もなく、五月雨のころになると、増水して川幅

が広くなり、対岸が遠くなったようすがうかがえます。

万葉集、巻十、作者未詳、七夕 につぎの和歌があります。

天の河遠き渡りはなけれども君が船出は年
にこそ待て

織女星にかわって詠んだ歌で、歌意は、天の河には、距離の遠い渡し場はないけれど、あなたの船出を、わたしは一年も待っています、という内容です。

為家が和歌を詠んだときには、この万葉集が頭にあっただと思われまます。

古典文学 その八（本文32頁を見てね）

七夕は思いしらなん

国助は、いまから約六百五十年まえ、鎌倉後期の歌人ですが、その頃、天の川は七夕伝説で有名だったこと、渡し船があったことがうかがえます。

天の川を詠んだほかの和歌 九首

出典「天野ヶ原と七夕伝説」

発行 天の川七夕星まつりの会

昔聞く天の河原を尋ね来てあとなき水をなが
むばかりぞ 藤原良経 新古今和歌集

天の川かよふ浮き木に言問わんもみじの橋は
散るや散らずや 実方朝臣 新古今和歌集

天の川名に流れたるかひありて今宵の月は殊
に澄みけり 西行 山家集

七夕の一夜の宿も幾夜寝ん天の川原の飽かぬ
仮庵かりほに 後柏原天皇 千首

狩りくらす交野の御野の天の川川風さむし宿

はなくして 宗良親王 千首

此処や又織たなはたつめ女に宿借りし天の川原の夕暮

れの空 飛鳥井雅経 明香集

天の川秋の一夜の契りだに交野に鹿の音をや
聞くらん 藤原家隆 続古今和歌集

月の澄む天の川原に宿借れば交野の鹿も哀れ
添いぬる 源家永 最勝四天王院障子和歌集

逢ふ事の今日も交野の天の川この渡しこそ浮
き瀬なりけれ 詠人知らず 続後拾遺集

古典文学 その九 (本文33頁を見てね)

またや見ん交野のみ野の

俊成は、いまから約八百年まえ、平安後期鎌倉初期の歌人ですが、その頃、交野は桜で有名で、京都から花見客が訪れたこと、そうして、夜明けのころ、朝が白みゆくなかで花吹雪を觀賞して風流を楽しんだようすがうかがえます。

こんにち、交野の桜の名所は多いですが、この和歌はどこを詠んだのでしょうか…。

同じく交野が原を詠んだ藤原公衡ふじわらのきんひら(俊成の約五十歳年下の歌人)の和歌、新古今和歌集、冬、鷹狩りのころをよみ侍りけるに、

狩りくらし交野の真柴折ましほりしきて淀の川瀬の月を見るかな

というのがあります。これによりますと、冬、一日鷹狩りしたあと、地面には小枝を折って敷いただけの簡素な野営で、焚き火の焼き鳥などを食べながら、淀川の浅瀬の月影をめで

たようすがうかがえます。当時、淀川までを交野が原とよんでいたこともわかります。

俊成も、そのように粗末な野営で夜をすごし、花冷えの早朝、雪のように降りしきる落花をめでたのでしょうか。

枕草子の冒頭、第一段に、清少納言はつぎのように述べています。

春は あげぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。

現代語に訳します。

春はあげぼのがすばらしい。ほのぼのと白みゆく山の端はが、すこし赤みを帯び、あかね差す雲の細くたなびくさまがすてき。

原文はあまりにも有名な名文ですが、あかつき(暁)、しののめ(東雲)は夜明け直前でもまだ暗いとき、あげぼの(曙)は、ほのかに陽の光で夜が白みはじめるころをいいます。

俊成も清少納言も、春のあげぼののそんな微妙な光の変化を描写しますが、こんにちの

都会生活の室内照明と室内暖房のなかで、そこまで感じる繊細な感性が退化してしまったとしたら、宝物をひとつ失った感じがします。

『太平記』（俊成の没後約一七〇年のころ、室町時代に成立したといわれる）には、俊成のこの和歌を意識して書いたと思われる文章があり、その時代、依然として交野は桜で有名であったことをうかがわせます。

鎌倉時代末の公家日野俊基は、後醍醐天皇との鎌倉幕府討幕の謀議が発覚し、捕らえられて鎌倉に送られ処刑されます。その道行きを述べる次の文章の冒頭がそれです。

「…落花の雪に踏み迷う片野の春の桜がり、紅葉の錦を衣て帰る嵐の山の秋の暮。一夜を明す程だにも、旅宿となればものうきに、恩愛の契りあさからぬ、我故郷の妻子をば、行末も知ず思置、年久しくも住馴し、九重の帝都をば、今を限りと願て、思はぬ旅に出玉ふ、心の中ぞ哀れなる…」

古典文学 その十 （本文34頁を見てね）

やかた尾の鷹手にすえて

基俊は、いまから約八百年まえ、平安後期の歌人ですが、その頃、交野が原は鷹狩りで有名で、京都から雉の獵に訪れたようすがうかがえます。

鷹狩りとは、飼いならした鷹を放って鳥をとらえさせる獵のことで、古墳時代からおこなわれ、平安時代ころまでは、天皇・貴族のあいだで盛んでした。

今日でも山麓などで、雉をよく見かけますが、当時、一般の人は交野が原に入ることが禁止されていて、いまも「禁野」（京阪電車枚方市駅と御殿山駅間）という地名が当時の名残をとどめています。

なお、交野市の市の木は桜、市の鳥は雉と制定されています。

交野が原を詠んだほかの和歌 三首

出典「北河内の歴史」ほか
 発刊 株式会社郷土出版社ほか

古もありとばかりは音に聞く交野のきぎす
 今日見つるかも
 中務内侍日記

夕付く日暮るる交野の桜狩り花に宿借る
 天の川風
 如願法師集 藤原秀能

狩りくらし交野の真柴折りしきて淀の川瀬の
 月を見るかな
 新古今和歌集 藤原公衡

○監 修 財団法人 交野市文化財事業団

○アドバイス 交野古文化同好会

○編集委員 (五十音順)

文 章 佐藤義也 交野市星のまち観光協会

高尾秀司 交野市星のまち観光協会

寺田政信 交野市星のまち観光協会

毛利信二 交野市星のまち観光協会

絵 画 奥田達治 交野市星田 画家

(有志生徒 猪倉稔正 津村喜美子 前原敏子)

桂 聖子 交野市南星台

杉浦つかさ 交野市藤が尾 画家・絵本作家

マ ッ プ 中村由美 交野市星のまち観光協会

表 紙

写真 山口喬純 岩手県胆沢郡 写真家

構成 大江治代 交野市星のまち観光協会

○編集者

交野市星のまち観光協会

交野市

天の川と七夕・星伝説のまち

交野の絵本

二〇〇七年七月 初版第一刷発行

二〇一六年九月 第二刷発行

監 修 財団法人 交野市文化財事業団

編 集 交野市星のまち観光協会

交 野 市

発行者 交野市星のまち観光協会

<http://www.katano-kanko.com/>

〒五七六八五〇一

交野市私部一丁目一番一号

電話 〇五〇(三七四〇)七二六二

表紙

昔々、神話や伝説が生まれた時代、天の磐船や流れ星となった北斗星、織姫と彦星、天女などの活躍舞台だったころの交野の空か、夜空をイメージできる表紙をつくりたいと探すうち、山口喬純さんの写真に出会いました。彼の写真の夜空を見つめますと、美しい闇の向こうに、まだまだ、神話や伝説が眠っているにちがいありません。